令和２・令和３年度

保健学研究科 FD 活動報告書

弘前大学大学院保健学研究科・医学部保健学科

FD 委員会

2022 年 3 月

目　　次

はじめに ---------- 2

令和２年度 ＦＤ講演会報告 ---------- 3

令和２年度 学外ＦＤ研修会報告 ---------- 11

令和３年度 ＦＤ講演会報告 ---------- 13

令和３年度 学外ＦＤ研修会報告 ---------- 20

おわりに ---------- 22

編集後記 ---------- 23

《はじめに》

現代社会は少子高齢化、グローバル化、価値観の多様化とともに、環境や倫理、教育、労働、医療等において多様な課題を抱えています。それらの課題に適応するべく、大学教育も各大学で改革が進められております。令和２年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、前期は授業開始の遅れから始まり、全面オンラインでの授業を余儀なくされました。後期には対面授業を始めるも、急な休講やオンライン講義への変更が度々あった激動の１年でした。本年度はほぼ対面授業が可能にはなりましたが、休講やオンライン授業への変更は少なからずありました。これを執筆している現在、また感染者数が増えつつありますが、来年度こそは通常の授業環境に戻ることを切に願います。

さて、我が弘前大学は地方に位置しており、卒業後に都会に出ていく多くの若者を抱え、学部改組や教育改革を基に地域で活躍する人材育成という大きな役割も担っております。教員は教育、研究を通して、学ぶ力、教育する力とともに課題を見つけ解決できる人材の育成に日々努力をしております。ＦＤ委員会も、教員個々のＦＤ活動を教員間あるいは教員と学生とで共有し相互に高め合うことを願い、活動してきました。その成果を「令和２年度・３年度ＦＤ活動報告書」にまとめましたので、今後の皆様方のＦＤ活動に少しでもお役に立てればと思っております。

藤岡

令和 2・令和 3 年度 FD 委員

委員名	代表所属
大津　美香	保健学研究科　看護学領域（委員長）
廣田　淳一	保健学研究科　放射線技術科学領域（副委員長）
藤岡　美幸	保健学研究科　生体検査科学領域（副委員長）
土屋　涼子	保健学研究科　看護学領域
門前　暁	保健学研究科　放射線技術科学領域
中野　学	保健学研究科　生体検査科学領域
小枝　周平	保健学研究科　総合リハビリテーション科学領域
牧野　美里	保健学研究科　総合リハビリテーション科学領域
平川　裕一	保健学研究科　学事委員会
上谷　英史	保健学科　学務委員会（令和 2 年度）
吉岡　治彦	保健学科　学務委員会（令和 3 年度）

令和 2 年度　FD 講演会報告

新型コロナウイルスの影響により、各大学ではオンライン授業が進められています。弘前大学もまた例外ではなく、オンラインでの講義や実習を行いました。慣れない準備に全教員が悩まされていたのは事実でありますが、オンライン授業のメリットも多くみられました。一方で、この方法には学生の反応、評価法や学力担保の難しさなど様々な課題もあることもみえてきました。

そこで今回、「オンライン授業における学力の担保と授業評価」と題し、講師として早稲田大学理工学術院教授の深澤良彰先生をお招きし、ご講演いただきました。今回は昨年末から感染拡大が認知され、世界の社会環境に大きく影響を与えている新型コロナウイルス感染症の影響を鑑み、リモート講演を試みることとなりましたが、大変参考になる内容となりました。

令和 2 年度 FD 講演会ポスター

また講演会終了後にオンデマンドの配信で視聴が可能な期間を設けました。

日　時：令和 2 年 9 月 14 日（月）18:00～19:30
会　場：弘前大学医学部保健学科 第 63 講義室（リモート講演）
講　師：深澤　良彰 先生　　早稲田大学理工学術院　教授，早稲田大学図書館長
講演名：オンライン授業における学力の担保と授業評価
参加者：26 名

オンデマンド配信視聴期間：講演会終了後～令和 2 年 10 月 16 日（金）
オンデマンド受講者　　：15 名

講師ご略歴

****

1978 年 4 月～1981 年 3 月	早稲田大学理工学部電気工学科　助手
1981 年 4 月～1983 年 3 月	相模工業大学（現　湘南工科大学）工学部情報工学科 非常勤講師
1983 年 4 月～1987 年 3 月	相模工業大学（現　湘南工科大学）工学部情報工学科 専任講師
1983 年 5 月～1985 年 3 月	早稲田大学教務事務システム開発準備室　嘱託
1987 年 4 月～1991 年 3 月	早稲田大学理工学部電気工学科　助教授
1987 年 4 月～1990 年 3 月	相模工業大学（現　湘南工科大学）工学部情報工学科 非常勤講師
1991 年 4 月	早稲田大学理工学部情報学科新設に伴い移籍
1992 年 9 月～2003 年 3 月	早稲田大学理工学部情報学科　教授
2003 年 4 月	早稲田大学理工学部コンピュータ・ネットワーク工学科 新設に伴い移籍
2003 年 4 月～2007 年 3 月	早稲田大学理工学部コンピュータ・ネットワーク工学科 教授
2004 年 9 月	学術院体制への移行により、早稲田大学理工学術院　教授
2006 年 4 月～	国立情報学研究所　連携研究部門　客員教授
2007 年 4 月～	早稲田大学理工学部再編に伴い、早稲田大学理工学術院 基幹理工学部情報理工学科　教授
2007 年 4 月～2011 年 3 月	中央大学大学院理工学研究科　非常勤講師
2007 年 4 月～2011 年 3 月	慶應義塾大学理工学部、慶應義塾大学大学院政策・メディア 研究科　非常勤講師
2008 年 4 月～2011 年 3 月	情報セキュリティ大学院大学　客員教授
2009 年 4 月～2010 年 3 月	法政大学理工学部電子情報学科　非常勤講師
2010 年 4 月～	神戸大学大学院医学研究科　客員教授

****

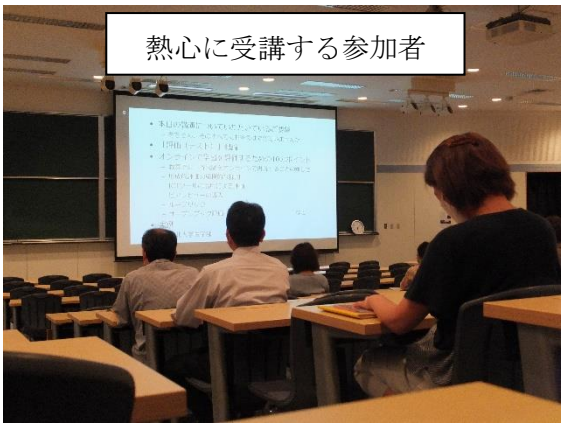
講演内容

- 本講演では、要望に基づき、「１．評価（テスト）の概論」「２．オンライン学習を評価するための 10 のポイント」「３．東北大学医学部での実例」「４．まとめ」という構成でご教授いただいた。
- このコロナ禍でどのように教育を継続し、特に評価をどのようにするのかというのが現在特に多くの関心が高い要望課題である。一言で表せば、「これといったすごい解決策はない」ので、いろいろな知識を駆使して何とかする。

- 大阪大学が公開している「オンライン学習を評価するための 10 のポイント」では、１．教室での一斉試験をオンラインで再現することは難しい、２．学問的誠実性について教える、３．学習目標を確認する、４．形成的評価を積極的に取り入れる、５．ICT ツールを活用して評価する、６．問題を工夫する、７．解答時間を制限する、８．出題パターンを増やす、９．ピアレビューを導入する、１０．各種リソースを活用することを推奨する、ということを考慮するよう述べている。
- 教員、学生双方にとって、評価は、ただ成績をつける（つけられる）だけのゴールではなく、授業を始めるためのスタートである。評価は何を何のためにするのかをきちんとしておかなければならない。1956 年に Bloom が提唱した 3 つの領域（知識、態度、スキル）を考慮し、評価の前に準備する必要がある。その他、総括的評価（学習後の評価）／形成的評価（小テストなど学習中に実施）／これら二つを織り交ぜた評価分類もある。
- 一斉テストを厳密に実施するためには、「学生のモニタリング」、「学生が使用するデバイスにおける安定的なネットワーク環境の提供」が必要となる。どうしてもこの方法で実施するためには制限時間は比較的余裕を持たせて、回答形式、持ち込み、実施プロセス、受験できなかった場合の対応法を考慮しなければならない。
- 一斉テストをできなかった場合は、レポートにて評価が可能である。最近の国内シンポジウムにおけるアンケート報告では、半分程度がレポートによる評価を実施していることが明らかとなっている。その次に多い評価法として、Open Book（調べることを可能とする試験）による試験によるものであった。
- 形成的評価をする際は、チェックリスト（ルーブリック）を作成して参照する方法がある。小テストや課題を提出させる際は自己評価させる。教員がこの提出を受けたら必ずフィードバックする（面倒）。
- 上記について個別へのフィードバックが面倒な際は、全体へフィードバックする。
- Open Book は応用力が求められる有効な課題評価法であるが、一方で予習・復習が不要であると勘違いしてその場限りの回答で学習しなくなる。
- 東北大学医学部での実例では、厳格な試験を、体育館を使用して対面形式で試験を行っていた（140 名）。費用と手間もそれ相当必要であった。
- この前期は、何とか教育研究を継続してきた。この経験（オンラインを使った研究教育）をもとに、良さを今後に生かさなければならない。
- 今後の推測として、学生の中には e ジャーナル、e ブックに慣れた人が出てきた可能性がある。今後もオンライン教育・研究が進めば、紙媒体の教科書を購入しなくなる。そしてそれら（ライセンス）を購入するのは誰か（大学か、個人か）？検討して展開していく必要がある。
- 質疑の中では、学生の集中力とオンライン（オンデマンド）授業の長さについて深澤先生へ質問があった。先生からは、大規模公開オンライン講座（MOOC）の構造を参考に

ビデオ視聴について 5~10 分が有効ではないかという回答があった。

リモート講演の様子


熱心に受講する参加者

令和 2 年度　FD 講演会アンケート結果（当日参加者）

参加者数 26 名、アンケート回収 24 名（回収率 92.3%）

質問1 あなたの所属についてお答えください。	
1.大学生	0
2.大学院生	0
3.保健学研究科職員	24
4.その他	0

質問2 受講の理由について教えてください。（複数回答可）	
1.講師に興味があったから	3
2.内容に興味があったから	23
3.参加しやすい開催日時だったから	3
4.参加しやすい会場だったから	1
5.参加費が無料だったから	3
6.その他	1

質問3 講演に満足されましたか？（択一）	
1.とても満足	12
2.やや満足	12
3.どちらともいえない	0
4.やや不満足	0
5.不満足	0

質問4 講演の内容は理解できましたか？（択一）	
1.とても理解できた	16
2.やや理解できた	8
3.どちらともいえない	0
4.やや難しかった	0
5.難しかった	0

質問5 講演の内容はあなたに役に立つものでしたか？（択一）	
1.とても役立つ	14
2.やや役立つ	10
3.どちらともいえない	0
4.あまり役立たない	0
5.役立たない	0

質問 6 FD講演会に参加して感想等がありましたらお知らせください。
オンライン授業における学生から見た意見や工夫して欲しい点なども学びたい。
今後の講義のあり方を考えるよい機会となりました。実習について非常に苦労しています。医療系のオンラインによる実習についての情報が欲しかったです。
教室での一斉試験をオンラインで再現することはできないと思っていたので、やり方次第で行うことができるということが驚きだった。ただし、メリットがある反面、デメリットも大きいため、何を学生に学んで欲しいか、どこに重点を置くのか等考えなければならないと感じた。
FD講演会のオンデマンド受講もあるといいと思いました。
毎回ミニテストを作りながら、思ったような答えを書いてくれなかったので悩んでいた。悩みながらだんだん問題作りがうまくなったように思うが、今日はその理由、根拠を確認できた気がする。
後期から対面授業が始まりますが、オンラインでの良さを理解し、ハイブリッドで学生にとって学びやすい教育を展開していきたいと思います。ありがとうございました。
要望に応えて頂き、ありがたかった。

令和 2 年度　FD 講演会アンケート結果（オンデマンド受講者）

オンデマンド配信視聴期間：講演会終了後～令和 2 年 10 月 16 日（金）
受講者数 15 名、アンケート回収 4 名（回収率 26.7%）

質問1 あなたの所属についてお答えください。	
1.大学生	0
2.大学院生	0
3.保健学研究科職員	4
4.その他	0

質問2 受講の理由について教えてください。（複数回答可）	
1.講師に興味があったから	
2.内容に興味があったから	4
3.オンデマンドの配信で視聴できるから	1
4.参加費が無料だったから	1
6.その他	

質問3 講演に満足されましたか？（択一）	
1.とても満足	3
2.やや満足	1
3.どちらともいえない	0
4.やや不満足	0
5.不満足	0

質問4 講演の内容は理解できましたか？（択一）	
1.とても理解できた	2
2.やや理解できた	2
3.どちらともいえない	0
4.やや難しかった	0
5.難しかった	0

質問5 講演の内容はあなたに役に立つものでしたか？（択一）	
1.とても役立つ	2
2.やや役立つ	2
3.どちらともいえない	0
4.あまり役立たない	0
5.役立たない	0

質問 6
内容を受講者内で話し合うチャットを立ち上げて、お互いの実践情報を交換してもいいかもしれませんね。
視聴させていただき、ありがとうございました。深澤先生が資料を画面に表示された際、上下の文字が見切れるときがあり、オンラインの難しさを実感しました。講演会の公開期間を長く設定していただいたおかげで、聞き逃し部分を繰り返し視聴できたり、一時停止して図表の細部を確認できた点はとても良かったです。今後は対面の講演会が増えると思われますが、オンラインとアーカイブを引き続き使っていただけると助かります。ご検討よろしくお願いいたします。

令和 2 年度学外 FD 研修

令和 2 年度の学外 FD 研修として下記に教員 9 名が参加した。

研　修　会　名	第 27 回大学教育研究フォーラム
主　　催	大学教育研究フォーラム実行委員会
共　　催	京都大学高等教育研究開発推進センター・京大オリジナル株式会社
日　　時	令和 3 年 3 月 17 日（水）9 時 30 分～17 時 45 分 令和 3 年 3 月 18 日（木）10 時 00 分～15 時 30 分
場　　所	オンライン
参　加　者	大津 美香 教員（看護学領域／看護学専攻） 土屋 涼子 教員（看護学領域／看護学専攻） 平川 裕一 教員（総合リハビリテーション科学領域／作業療法学専攻） 上谷 英史 教員（総合リハビリテーション科学領域／作業療法学専攻） 牧野 美里 教員（総合リハビリテーション科学領域／理学療法学専攻） 藤岡 美幸 教員（生体検査科学領域／検査技術科学専攻） 中野 学 教員（生体検査科学領域／検査技術科学専攻） 廣田 淳一 教員（放射線技術科学領域／放射線技術科学専攻） 門前 暁 教員（放射線技術科学領域／放射線技術科学専攻）

当フォーラムは、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、Zoom を用いたオンライン開催となった。フォーラムの概要は以下に記す。

1.　フォーラムの構成

フォーラムは二日間にわたり、シンポジウム、参加者企画セッション、個人研究口頭発表のセクションに分けられ開催され、各セクションの演題数は以下の通りである。

個人研究口頭発表	3/17：部会 1～17, 計 82 演題
	3/18：部会 18～33, 計 76 演題
シンポジウム（3/17）	4 演題
参加者企画セッション 1（3/17）	8 セッション
参加者企画セッション 2（3/18）	6 セッション

Zoom は各セッションあるいは部会ごとに設定され、セッションごとに人気のあるものがあり、参加者数のばらつきがみられた。

2.　1 日目　個人研究口頭発表の概要（部会 1~17）

部会は、アクティブラーニング、FD/SD、語学教育／ICT 活用、学生・学習支援、初年次・教養教育、評価・測定、学生／教員アンケート、国際化・グローバル化、キャリア教育、ポートフォリオ、芸術教育、情報・数理教育、アカデミックライティングなどの分野

に分かれ、演者が発表された。多くの演題では、コロナ禍におけるオンライン教育での様々な試みや諸課題を題材にした発表がみられ、共通して、対面授業とは異なる方法の必要性をアンケートなどで評価していた。

3.　「シンポジウム」について

「大学教育におけるニューノーマル（新しい生活様式）を展望する」をテーマに、4 名のシンポジストによるポストコロナあるいはアフターコロナでの考えが紹介された。後半は、全体ディスカッションを、アプリケーションツールである Miro を使って進められた。オンライン授業をはじめとしたニューノーマルでは、時間のマネジメントの重要性、急速なデジタル化が進んだ下でのアドミッション・ポリシー／カリキュラム・ポリシー／ディプロマ・ポリシーへの対応などが課題としてあげられた。

4.　「参加者企画セッション」について

前年度、2 日目だけに開催されていた当セッションは、多くの要望に応じる形で、今年度 2 日間の開催となった。1 日目に 8 セッション、2 日目に 6 セッションがそれぞれ同時に開催された。1 日目に「正課教育教育と正課外教育をつなぐ学習支援に関する総合的研究序論」、「バーチャルの力でオンライン授業の限界を突破する」など、また 2 日目に「カリキュラムと組織のマネジメントからキャリア教育を考える」、「エビデンスにもとづく教育支援」などが企画され、Zoom 入室者も参加しながら、オンラインツール（パワーポイントやグーグル form や Miro）を使用しながら議論が交わせた。

令和３年度　FD 講演会報告

新型コロナウイルス感染拡大を受け、各大学授業はオンライン化の流れがみられ、早１年半が経過しました。弘前大学もまた例外ではなく、各種ソフトウェアを使用したオンラインでの講義や実験・実習が情報基盤センターからの支援のもと行なわれてきました。当初、慣れない準備に全教員が悩まされていたのは事実ではありますが、経験を重ねるごとにオンライン授業のメリットも多くみられました。一方で、この方法には学生の反応、評価法や学力担保の難しさなどの諸課題もみえてきたことから、各専門領域の学生に対するアドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーを達成するためには、何らかの工夫が必要な状況でした。

令和３年度 FD 講演会ポスター

そこで今回、「ルーブリック評価基準の作成方法」と題し、講師として大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部准教授の佐藤浩章先生にご講演頂きました。今回は新型コロナウイルス感染症の影響を鑑み Zoom によるオンライン開催となりました。Zoom のブレイクアウト機能を使用しグループワークも行い、大変参考になる内容となりました。

また講演会終了後にオンデマンドの配信で視聴が可能な期間を設けました。

日　時：令和３年９月 30 日（木）17:00～18:30
会　場：Zoom によるオンライン開催
講　師：佐藤　浩章 先生
　　日本高等教育開発協会　会長，大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部　准教授
講演名：ルーブリック評価基準の作成方法
参加者：44 名（最大時）

オンデマンド配信視聴期間：講演会終了後～令和３年 10 月 31 日（日）
オンデマンド受講者　　：12 名

講師ご略歴

****

2002 年 4 月～2005 年 3 月　愛媛大学　大学総合教育センター教育システム開発部　講師
2004 年 4 月～2005 年 3 月　愛媛大学　教育・学生支援機構
教育開発センター教育開発部　講師
2005 年 4 月～2006 年 3 月　愛媛大学教育・学生支援機構
教育開発センター教育開発部　助教授
2006 年 4 月～2007 年 3 月　筑波大学　大学研究センター　客員研究員
2006 年 4 月～2008 年 3 月　国立教育政策研究所　高等教育研究部　調査研究委員
2008 年 4 月～2008 年 7 月　名古屋大学　高等教育センター　客員准教授
2008 年 4 月～2009 年 3 月　北海道大学　高等教育機能開発総合センター　客員准教授
2009 年 4 月～2010 年 3 月　北海道大学　高等教育機能開発総合センター　客員研究員
2009 年 4 月～2010 年 3 月　大学評価・学位授与機構　評価研究部　調査研究協力者
2009 年 10 月～2010 年 4 月　King's College London King's Learning Institute Visiting Research Fellow
2009 年 4 月～2012 年 3 月　国立教育政策研究所　高等教育研究部　客員研究員
2005 年 4 月～2013 年 7 月　松山大学経営学部　非常勤講師
2006 年 4 月～2013 年 9 月　愛媛大学　教育・学生支援機構教育企画室　准教授
2007 年 4 月～2013 年 9 月　愛媛大学　教育・学生支援機構教育企画室　副室長
2015 年 10 月～2015 年 12 月　名古屋大学　大学院国際開発研究科　国内研究員
2012 年 4 月～20116 年 3 月　北海道大学　高等教育機能開発総合センター　研究員
2013 年 10 月～2016 年 4 月　大阪大学　教育学習センター　副センター長（兼任）
2014 年 4 月～2017 年 3 月　早稲田大学　人間科学学術院　非常勤講師
2012 年 4 月～2019 年 6 月　新潟医療福祉大学　客員教授
2018 年 4 月～2021 年 3 月　追手門学院大学　教育開発センター　客員教授
2020 年 9 月～2021 年 3 月　東京大学　教育学研究科総合教育科学専攻
大学経営・政策コース　非常勤講師
2012 年 11 月～現在　愛媛大学　教育・学生支援機構　客員教授
2013 年 4 月～現在　大正大学　客員教授、教育開発センター顧問
2013 年 10 月～現在　大阪大学　全学教育推進機構　教育学習支援部　准教授
2017 年 10 月～現在　京都先端科学大学　カリキュラムアドバイザー
2020 年 4 月～現在　近畿大学　教育改革推進センター　客員教授
2020 年 6 月～現在　新潟総合学院開志専門職大学　顧問
2021 年 4 月～現在　大阪大学　高等教育・入試開発研究センター　准教授（兼任）

****

講演内容

- 大学設置基準第 25 条の 2 に「大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するために、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準に従って適切に行うものとする。」とある。シラバスの成績評価欄にテスト何%、レポート何%と記載することが一般的となっているが、これで「あらかじめ明示した」ことになるかはやや疑問が残る。
- 内容構成は、「1. ルーブリックとは？」、「2. 様々な種類のルーブリック」、「3. ルーブリックの段階」、「4. ルーブリックを使ってみる」、「5. なぜルーブリックを使うのか？」、「6. ルーブリックのニーズの高い場合」、「7. 作成・使用上の留意点」、「8. ルーブリックの策定手順」、「9. ブラッシュアップ」、「10. FAQ（よくある質問）（参照）」である。
- 本講演の到達目標は次の 5 点である。「1. ルーブリックとは何かを説明できる」、「2. ルーブリックを使用するメリットを説明できる」、「3. ルーブリックを使って採点ができる」、「4. ルーブリックのモデレーション（修正）ができる」、「5. ルーブリックを作成することができる」

「1. ルーブリックとは？」

- 学習の達成状況レベルを評価するときに使用される評価基準で、学習の実現状況の度合いを示す数段階の尺度と、それぞれの尺度にみられる学習の質的な特徴を示した記述語や学習作品から構成される。客観テストでは評価できない、高度で複合的な能力を評価するために開発された。パフォーマンス評価の一連のものの一つ。1990 年代後半以降、社会で求められる能力の変化に対応した評価方法。

「2. 様々な種類のルーブリック」

- 大きく、①課題ルーブリック、②科目ルーブリック、③カリキュラム・ルーブリック、④期間ルーブリックの 4 つに分けられる。
- 科目ルーブリックの中に課題ルーブリックが含まれ、その科目ルーブリックを包括するカリキュラム・ルーブリックがあり、それを全体評価する機関ルーブリックがあるという入れ子構造になっている。かつ、目標に一貫性がなくてはならない。

「3. ルーブリックの段階」

- 一般的に 3～5 段階が推奨されている。特に初めて作成する場合には、3 段階から作成することが推奨されている。
- 尺度を表す標語（headings）は任意で設定する。
- 1 段階ルーブリックもある。ただし、学生の力量が低い場合は効果が表れない。

「4. ルーブリックを使ってみる」

- 3～４名のグループに分かれてグループワークの実施。
- ルーブリックを使用しての採点を実施する。配布資料の中に学生の書いたミニレポート4本と、そのレポートを評価するルーブリックが4枚ある。3年生が書いたレポートと想定する。まず個人で採点する（15分）。その後、3～4名で採点会議を実施し、合意形成をする（10分）。
- ルーブリックを使用する前に、使用予定の複数人が同じルーブリックを使って課題を評価する（モデレーション）。

「5. なぜルーブリックを使うのか？」

- ルーブリックには、成績評価にかかる時間を節約してくれる、評価がぶれにくい、異なる人が評価しても同様の結果となりやすい、判読可能で意味のある詳細なフィードバックをタイミングよく与えることができる、「学生に期待されていること」について課題提出前に教員・学生間で共有でき双方がその期待に向けて行動を変容させることができる、といったメリットがある。
- 教員にとって授業改善の機会となる。カリキュラム全体の質の評価にも使用できる。

「6. ルーブリックのニーズの高い場合」

- レポート、実習、プレゼンテーションを評価する場合、同一科目を複数教員で担当する場合、カリキュラム・アセスメントを行う場合、人事評価を行いたい管理職など、様々な場面で使用可能である。

「7. 作成・使用上の留意点」

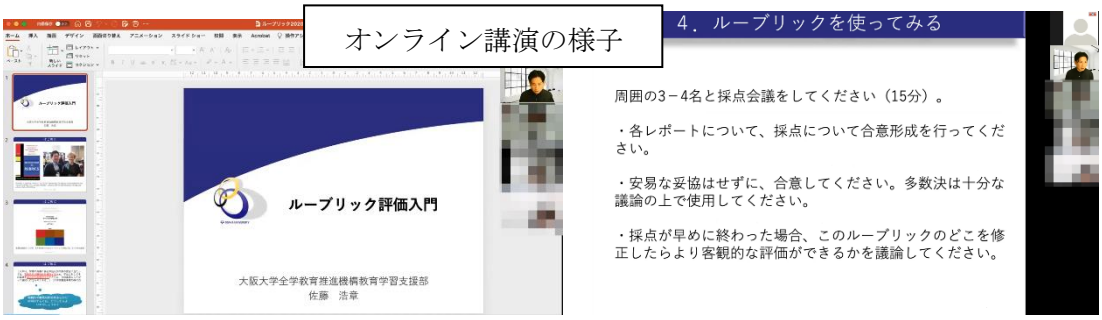
- 手間をかけずに作成する場合、インターネット上で掲載されているものが参考になるが、最も参考になるのは同僚教員が作成したものである。
- 課題に取り組む前に読んでもらい確実に理解してもらうことが大切である。読む機会を授業中に設けることもあり得る。
- 学生と一緒に作成するとさらに効果的である。
- 最初から完璧なものはできないと言われており、3回程度改訂が必要。

「8. ルーブリックの策定手順」

- まず課題を記述する。次に観点を作成し、尺度を設定し、評価基準を設定する。
- ルーブリックを作る個人作業（10分）。

「ふりかえり」

- 「本研修のルーブリック」を使用し自分自身で振り返りをする。



令和 3 年度　FD 講演会アンケート結果

参加者 55 名：当日参加者 44 名（最大時）、オンデマンド視聴者 12 名
アンケート回収 31 部：当日参加 25 部、オンデマンド参加 6 部

質問1 あなたの所属についてお答えください。	
1.大学生	0
2.大学院生	0
3.保健学研究科職員	26
4.その他	5
被ばく医療総合研究所職員3名 青森中央学院大学・青森中央短期大学2名	

質問2 受講の理由について教えてください。（複数回答可）	
1.講師に興味があったから	4
2.内容に興味があったから	29
3.参加しやすい開催日時だったから	4
4.オンラインでの参加が可能だったから	10
5.参加費が無料だったから	1
6.その他	3
青森中央学院大学にも参加の案内をいただいたから FD委員 今後の授業において使用していく可能性があったから	

質問3 講演に満足されましたか？（択一）	
1.とても満足	29
2.やや満足	2
3.どちらともいえない	0
4.やや不満足	0
5.不満足	0

質問4 講演の内容は理解できましたか？（択一）	
1.とても理解できた	24
2.やや理解できた	7
3.どちらともいえない	0
4.やや難しかった	0
5.難しかった	0

質問5 講演の内容はあなたに役に立つものでしたか？（択一）	
1.とても役立つ	30
2.やや役立つ	1
3.どちらともいえない	0
4.あまり役立たない	0
5.役立たない	0

質問６　FD講演会に参加して感想等がありましたらお知らせください。
本日は企画等ありがとうございました。勉強になりました。
ありがとうございました。
是非、活用しようと思います。
ありがとうございました。
外部から参加させていただき、大変ありがとうございました。感謝いたします。
実践的な内容で大変勉強になりました。評価の観点はいつも迷っており、他の学生と差を付けないように気を付けようとしても難しく思っておりました。今回の内容を活かしていきたいと思います。ありがとうございました。
非常に新鮮な体験でした。研修に応募する応募者の評価に使ってみたいと思います。ありがとうございました。
演習を含め内容の濃い講演会でした。他の職員にも参加を促したいと思います。
もう少し時間をかけて学びたかったが、とてもためになりました。
アドバンスレベルもぜひ受講したいです。
面白かったです。自身の自己評価に使いたいですね。
とてもためになりました。ブレイクアウトセッションもあって楽しく参加できました。 ありがとうございました。
ルーブリックを活用することで、評価がぶれないことがわかりました。レポートへのコメントなどに活用できれば、こちらの気持ちが伝わることに加え、学生がどう改善できるのかが具体的にわかり、学習効果にもつながると思いました。複数で担当している科目について、気軽に相談しながらルーブリックを作成してみたいと思いました。グループワークがあり、楽しみながらできました。ありがとうございました。
この度は参加させていただきありがとうございました。 （マイクの不具合により、作業の際に同室の方々にご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ありませんでした…。） 講義だけでなく、作業をしたことによりやはり擦り合わせ、複数人での検討が必要であることを実感しました。
ルーブリックを用いた評価に興味を持っていたので、よく理解できたと思う。
当日の動画を後日視聴できるようにしていただき大変感謝しております。ありがとうございました。

令和 3 年度学外 FD 研修

令和 3 年度の学外 FD 研修として下記に教員 9 名が参加した。

研　修　会　名	第 28 回大学教育研究フォーラム
主　　催	大学教育研究フォーラム実行委員会
共　　催	京都大学高等教育研究開発推進センター・京大オリジナル株式会社
日　　時	令和 4 年 3 月 16 日（水）9 時 30 分～17 時 45 分 令和 4 年 3 月 17 日（木）9 時 30 分～16 時 00 分
場　　所	オンライン
参　加　者	大津 美香 教員（看護学領域／看護学専攻） 土屋 涼子 教員（看護学領域／看護学専攻） 門前　 暁 教員（放射線技術科学領域／放射線技術科学専攻） 吉岡 治彦 教員（生体検査科学領域／検査技術科学専攻） 藤岡 美幸 教員（生体検査科学領域／検査技術科学専攻） 中野　 学 教員（生体検査科学領域／検査技術科学専攻） 平川 裕一 教員（総合リハビリテーション科学領域／作業療法学専攻） 小枝 周平 教員（総合リハビリテーション科学領域／作業療法学専攻） 牧野 美里 教員（総合リハビリテーション科学領域／理学療法学専攻）

当フォーラムは、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、Zoom（参加者企画セッション）、ONLINE CONF（個人研究口頭発表・ポスター発表）、ウェビナー（シンポジウム）を用いたオンライン開催となった。個人研究口頭発表・ポスター発表に ONLINE CONF を使用したのが、今年度の新しい試みであった。

フォーラムの概要は以下に記す。

1.　フォーラムの構成

フォーラムは二日間にわたり、シンポジウム、参加者企画セッション、個人研究口頭発表、個人研究ポスター発表のセクションに分けられ開催され、各セクションの演題数は以下の通りである。

個人研究口頭発表	3/16：部会 1～13, 計 50 演題
	3/17：部会 14～26, 計 52 演題
個人研究ポスター発表	3/16：16 演題
	3/17：17 演題
シンポジウム（3/16）	4 演題
参加者企画セッション 1（3/16）	3 セッション
参加者企画セッション 2（3/17）	9 セッション

2.　「個人研究口頭発表」について

部会は、アクティブラーニング、キャリア教育、リーダーシップ教育・PBL、芸術教育、情報・数理教育、FD・SD、医療系教育、語学教育、学生・学習支援、初年次・教養教育、評価・測定、アカデミックライティング、学生／教員アンケートなどの分野に分かれ、演題発表された。前年に引き続き、コロナ禍におけるオンライン教育に関する発表が多くみられた。オンライン授業の工夫点や、学生の満足度に関する調査などが発表されていた。

3.「個人研究ポスター発表」について

前年度にはなかった「個人研究ポスター発表」が企画され、2 日間で 33 演題の発表があった。各発表に、ONLINE CONF 上で「意見交流場」が設定されており、発表者や他の参加者とビデオ通話で会話できる場が設けられていた。またこのシステムを円滑に使用できるよう 1 週間程前に事前練習の場が設けられていた。口頭発表と同様ポスター発表でもオンライン授業に関する発表が多く、他にも ICT（Information and Communication Technology）や LMS（Learning Management System）に関する発表もあった。また、大学院生に注目したラボ内の調査も一部見られた。例えば東北大学の和田山グループの調査では、研究活動の充実度向上にむけたメンタリングツールのアンケートが実施され、研究室内の先輩後輩間での実験やゼミを通してメンタルが向上していく構造を解析して見出した。

4.「シンポジウム」について

「コロナ禍を経た今、あらためて単位制度につい考える―時間ベースと成果ベースの間で―」をテーマに、4 名のシンポジストから講演があった。コロナ禍でオンライン授業やハイブリット型授業を経験し、「単位とは何か」ということについて考えさせられることとなった。このシンポジウムでアメリカの単位制度、医学教育におけるコンピテンシーベース教育、オンライン教育、大学設定基準といった観点から検討がなされた。

5.「参加者企画セッション」について

前年度に引き続き、今年度も 2 日間の開催となった。1 日目に 3 セッション、2 日目に 9 セッションがそれぞれ同時に開催された。1 日目に「オンラインで学生の関係性を構築するための場づくりの工夫－ファシリテーションの視点からの見直し―」、「大学における数学データ利活用のリアルを見つめよう！－IR 期待論からデータ駆動型組織行動論への価値転換－」など、また 2 日目に「大学教育センター（CTL: Center for Teaching and Learning）等をいかに改善するか」、「汎用的能力の形成を可能にするもの―ミネルヴァ大学の学生・教員へのインタビューから考える―」などが企画された。オンライン授業との対面授業のコミュニケーションの違いに関するインタビュー調査が紹介されていた。

門前、牧野

《おわりに》

令和 2 年 3 月 13 日に成立した新型コロナウイルス対策の特別措置法に基づく措置として、令和 2 年 4 月 7 日に日本国内において初めての緊急事態宣言が発令された。令和 2 年度は新型コロナウイルス対策のため、多くの大学で IT を活用した授業が取り入れられるようになり、本学においても、期せずしてオンライン授業を行うことになった。当初は不慣れな遠隔授業のため、教員と学生の双方において、操作に手間取り時間を要したりもしたが、オンライン授業の利点や欠点を各教員が考慮して試行錯誤しながら前期の授業を行っていた。オンライン授業では、対面授業よりも学生の理解度が進まないのではないか、授業評価を適切に行うためにはどのような方法を用いたらよいのか等の課題が挙がった。このような経緯から、令和 2 年度は、早稲田大学理工学術院教授の深澤良彰先生に「オンライン授業における学力の担保と授業評価」と題して、オンライン授業の学習を評価するためのポイントや実例をご講演いただいた。後期の授業に役立てられるよう例年よりも早期開催とし、後期の授業評価に早速活用することができた。

令和 3 年度の FD 講演会は東京オリンピック 2020 閉幕後の時期でもあり、新型コロナウイルス感染拡大が収まらず、講師の大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部准教授の佐藤浩章先生には、直前まで開催方法をご検討いただいた。オンライン開催となったが、「ルーブリック評価基準の作成方法」のご講演には、学内外から例年よりも多くの教職員や大学院生が参加した。また、令和 2 年度の講演会と合わせて録画の許可をいただき、条件を満たす希望者には視聴を可能とした。大学の第 3 期中期目標・計画において、本学が達成目標としているルーブリック等の整備に向けて、ルーブリック評価基準の作成方法をワークショップ形式によって具体的にご教授いただいた。参加者からは「とてもためになった」「アドバンスレベルも受講したい」等の意見が寄せられ、回答者の 9 割が「とても役に立つ」と認識し、高評であった。

第 27 回及び第 28 回の大学教育研究フォーラムはオンライン開催となった。これにより、旅費等の経費の課題が解決され、FD 委員の多くがフォーラムに参加することができた。オンライン化がもたらした恩恵でもあった。FD 委員にとって大学教育研究フォーラムへの参加は、大学教育の改善に向けて検討するためには欠かせないものである。アフターコロナにおいても、ハイブリッド開催の機会があれば、FD 委員の参加機会が増え、FD に対する意識を一層高めることにもつながると考える。今後は FD フォーラムを情報収集の場と捉えるだけでなく、本学の FD 活動報告を発信する場となることを願う。

大津

編集後記

コロナ禍であったこの 2 年間の環境によって、メディアによる授業やセミナーが主体となる機関が大幅に増え、それに伴った議論が FD では増えた印象にある。当保健学研究科も例外ではなく、本学の情報基盤センターが中心となって構築したメディア授業ツールの使用によって、各教員は次第に使い慣れ、学習環境を構築するまでに至った。その中で当 FD 委員会より提供された学外講師による FD セミナーは、本研究科のメディア授業の方法へ意義のある情報を共有していただいたと感じる。しかしながら、京都大学主催の FD フォーラム内でも議論されているように、今後もメディア授業や保健学教育全般における方法の改善点は多分にあると感じる。今後も引き続き各領域の先生方のお力をいただき、当委員会の活動によってより良い教育環境の改善が保健学研究科に提供されればと思う。（門前）

令和 2 年度および 3 年度の 2 年間の活動報告書を発行することとなりました。令和元年度末から続くコロナ禍も 2 年以上となり、この報告書もコロナ禍の影響を強く受けた内容になっています。FD フォーラムではオンライン授業に関する発表も多くあり、デメリットだけでなくメリットもあるということを学びました。また、大学の授業だけでなく、学会や講習会等がオンライン化されたことにより、今まで参加が難しかったものへの参加が可能になり、新たな学びの機会が増えたように思います。学んだことを、今後の業務に活かせるよう日々精進しなくてはならないと改めて思っております。（牧野）

令和 2・令和 3 年度
弘前大学大学院保健学研究科 FD 委員会活動報告書
発行日　2022 年 3 月 31 日
発行者　弘前大学大学院保健学研究科
〒036-8564　青森県弘前市本町66番地 1
電話　0172-33-5111（代表）